〔共同研究〕

『仙芥集』翻刻⑤

中世東国仏教研究会

はじめに

『仙芥集』は、中世鎌倉の地で精力的な受法活動を行った真言僧定仙（一二三三～一三〇二）の受法記録を集成したものである。その写本は管見の限り国宝称名寺聖教（称名寺所蔵、神奈川県立金沢文庫管理）にのみ伝存しており、目録上で全三十二部（一三函―一―一～三二）という大部のテキスト群である。当研究会ではこの写本を底本として翻刻を行っている。

昨年度までの中間報告で一三函―一―一から二〇までの翻刻を終えており、本年度はその続きである二一～二七までの七冊分の翻刻を完了した。

本年度の研究会参加メンバーは、代表・大八木隆祥（解題、二四・二七翻刻）、山口史恭、中保之（二二・二三翻刻）、坂本眞觀、牛久智充、新井弘賢（二五翻刻）、青木亮敬（二六翻刻）、野々部利生（二一翻刻）である。

最後に、保管資料である国宝『仙芥集』の翻刻・掲載をご許可くださいました神奈川県立金沢文庫ご当局に感謝申し上げます。

解題

今回翻刻したテキストは一三函―一―二一～二六の六本である。その書誌データと共に内容を概説する。

①一三函一―二一

〔外題〕仙芥集　金剛界口傳　〔角書〕（表紙中央）金剛界口傳　〔本文残存状態〕完全　〔書写者〕釼阿〔装丁〕綴葉（二綴・横半帳）　〔紙数〕九紙一八丁　〔料紙〕楮紙　〔法量〕一四・五×二二・二　〔行格〕一一～一二行　〔手沢者名〕釼阿（梵字）（表紙右下）　〔加点等〕合点・訓点あり　〔保存状態〕修理済　〔識語〕建治三年二月五日記了、定仙 一交了

奥書によれば、定仙により建治三年（一二七七）二月五日に記されたことがわかるが、誰の口伝かは記されていない。本文中には「仰せに云く」とあるのみで、それが誰の仰せかは不明である。「広沢には」等、広沢方と対比する記述が見られることから、小野方のいずれかの法流であると考えられる。また、「三宝院流」との対比も見られることから、醍醐三宝院流以外の小野方の法流である可能性が高い。一か所、次第に現れるある文言について「三宝院の本には無し、勧修寺の本にあり」とあることから、当該の次第は勧修寺流のものである可能性が高い。

内容は金剛界次第の口伝であるが、記述は簡略で達意的であり、扱う次第も初心が用いる行用の次第ではなくいわゆる広次第のようであるので、已達向けの伝授であったと考えられる。

②一三函一―二二

〔外題〕仙芥集　胎蔵界口傳　〔角書〕（表紙中央）胎蔵界口傳　〔本文残存状態〕完全　〔書写者〕釼阿　〔装丁〕綴葉（一綴・横半帳）　〔紙数〕六紙一二丁　〔料紙〕楮紙　〔法量〕一四・五×二二・三　〔行格〕一〇～一二行　〔手沢者名〕釼阿（梵字）（表紙右下）　〔加点等〕合点・訓点あり　〔保存状態〕修理済　〔識語〕（十丁表）健治三年二月九日記之了　定仙

巻中識語には「健治三年二月九日記之了　定仙」とあることから、前の一三函一―二一『金剛界口伝』に続く一具のものと考えられる。やはり阿闍梨や法流の名は見られず、「仰せに云く」とあるのみである。こちらでも前冊同様、当該次第の勧修寺本と三宝院本との対比が見られる。よって、ここに記されているのは勧修寺流の胎蔵界広次第についての口伝であると考えられる。

③一三函一―二三

〔外題〕仙芥集　〔角書〕三宝院駄都次第口傳／意教上人　（表紙中央）両界口傳（并駄都口傳／意教上人）　〔本文残存状態〕完全　〔書写者〕釼阿　〔装丁〕綴葉（二綴・横半帳）　〔紙数〕一〇紙二〇丁　〔料紙〕楮紙　〔法量〕一四・四×二二・一　〔行格〕一一～一二行　〔手沢者名〕釼阿（梵字）（表紙右下）　〔加点等〕合点・訓点あり　〔保存状態〕修理済　〔識語〕弘安元年十二月卅日記之了、定仙　一交了

三宝院流の駄都法と両界について意教上人頼賢の口伝を記したものである。ただし、定仙が頼賢から直接受法した形跡はなく、本書でも「有る人云く、上人の仰せに云く」や「又、別の人の云く、上人の仰せ

とて人の申されしは」とあり、頼賢の伝を受けた別の人からの伝聞として記されていることがわかる。頼賢より受法した人物は多いが、定仙はそのうち願行房憲静・仏性房義能・了一房公然から受法している。本書が記された弘安元年（一二七八）の時点で受法しているのは義能と公然であるので、本書に記された頼賢の口伝もこの二師から聞き及んだものが中心である可能性が高い。

④一三函一―二四

〔外題〕仙芥集　〔角書〕（表紙中央）瑜祇汀私抄　〔本文残存状態〕完全　〔書写者〕釼阿　〔装丁〕綴葉（一綴・横半帳）　〔紙数〕五紙一〇丁　〔料紙〕楮紙　〔法量〕一四・五×二二・六　〔行格〕一二～一四行　〔手沢者名〕釼阿（梵字）（表紙右下）　〔加点等〕梵字・合点・訓点あり　〔識語〕永仁四年定仙記之、後追少々記加之、但有誤歟、後學可被直之、此汀輙不可與人云々

『瑜祇経』に基づく特殊な灌頂「瑜祇灌頂」に関する口伝を集成したもの。本書六丁裏には次のような記述がある。

「定仙、三方よりこれを受く。三方とは卿の阿闍梨（増瑜）と定祐と能海となり。願（行）上人と殿の法印とはただ物語りに談ずるなり。よって永仁四年九月二日、釈迦堂にて同法四人にこれを授く。みな具足してこれを授くなり。云云」

卿阿闍梨増瑜（一二七五～一二八五頃在鎌）は勧修寺流の寛典方を中心に栄然方・真慶方を相承する人物であり、三河僧都定祐（一二七八頃）は阿性上人覚宗から勧修寺流栄然方を相承している。能海（一二八九頃）は禅遍宏教より保寿院流・西院流の印可を受けているが、後に定清より金剛王院相伝の三宝院流を受け、

また金剛王院流の祖・実賢の灌頂資である勝円より金剛王院流を相承している。すなわち、勧修寺流の増瑜と定祐、金剛王院流の能海から受けた瑜祇灌頂についての口伝を記したものであり、また共に勧修寺流の覚宗の資である願行房憲静と殿法印良宝の伝については受法ではなくただ聞いた話として記したものであるとしている。

ここでは永仁四年（一二九六）九月二日に定仙の住房である鎌倉亀谷新清涼寺釈迦堂において同法四人に対してこれを授けたとあり、奥書にも「永仁四年、定仙これを記す」とあるので、本書は定仙が阿闍梨として瑜祇灌頂を授けたことを踏まえて、定仙自身が諸師の伝をまとめたものと考えられる。

⑤一三函一―二五

〔外題〕仙芥集　〔角書〕（表紙中央）ho-ma（護摩）要抄（表紙見返）指環事／作壇事（付橛五色）／破壇事　〔本文残存状態〕完全　〔書写者〕釼阿　〔装丁〕綴葉（一綴・横半帳）　〔紙数〕六紙一二丁　〔料紙〕楮紙　〔法量〕一四・五×二一・八　〔行格〕一三～一四行　〔手沢者名〕釼阿（梵字）（表紙右下）〔加点等〕梵字（真言）・合点・訓点　〔保存状態〕修理済　〔識語〕正応二年十二月廿八日記之、定仙云々

本冊から三冊続けては護摩についての口伝を記したものである。本冊には表題等に法流名は記されていないが、本文の記述からは勧修寺流の口伝を中心に、ところどころ余流の伝と比較していることがわかる。内容は表紙裏に「指環事／作壇事付橛五色／破壇事」とある通りである。

奥書には「正応二年（一二八九）十二月廿八日記之、定仙」とあるが、願行上人憲静による勧修寺流の求

聞持法の口伝を記した『仙芥集』一三函一―一八の巻中識語には「正応二年十二月比於願行上人奉受之畢定仙」（一四丁表）とあり、また「正応二年十二月十八日記之　定仙」（一五丁表）とあることから、本冊もまた憲静が相承する勧修寺流栄然方の伝を中心として記されている可能性が高い。

⑥一三函一―二六

〔外題〕仙芥集　〔角書〕（表紙中央）ho-ma（護摩）要抄（行海）　〔本文残存状態〕完全　〔書写者〕釼阿　〔装丁〕綴葉（一綴・横半帳）　〔紙数〕一二紙二四丁　〔料紙〕楮紙　〔法量〕一四・五×二二・四　〔行格〕一二～一四行　〔手沢者名〕釼阿（梵字）（表紙右下）　〔加点等〕梵字（真言）・合点・訓点・挿図・護摩壇図　〔保存状態〕修理済

前冊と同じ「護摩要抄」というタイトルであるが、前冊が作壇作法や破壇作法、あるいは指環といった護摩の行法以外についての口伝を記したものであったのに対し、本冊は表紙裏に「行事／八千枚／不審条々」とある通り、勧修寺流の護摩の行法そのものについての口伝を記したものである。一〇丁表の識語には「正応六年二月三日従忍済真慶両人作法中為行事抄書之　定仙」とあり、前半一〇丁表までの護摩の行法については正応六年（一二九三）二月に記されたことがわかる。一〇丁裏からの八千枚護摩の口伝については奥書がないため執筆に係る状況は不明である。前・後半ともに本文中には「卿阿闍梨」と多く記され、卿阿闍梨増瑜の口伝を中心としていることが窺える。一方で、「佐々目（頼助）」「了一上人（公然）」「大政法印（親玄）」「常陸僧都（定宣）」「願上人（憲静）」の伝も記され、諸流の伝が比較されていることがわかる。

⑦一三函一―二七

〔外題〕仙芥集 ho-ma（護摩）私記　〔角書〕（表紙中央）行海　〔本文残存状態〕完全　〔書写者〕釼阿　〔装丁〕綴葉（一綴・横半帳）　〔紙数〕七紙一四丁　〔料紙〕楮紙　〔法量〕一四・五×二二・二　〔行格〕一一～一五行　〔手沢者名〕釼阿（梵字）（表紙右下）　〔加点等〕梵字・訓点・挿図・護摩壇図　〔保存状態〕修理済

本冊は、前冊の一〇丁表の奥書までの文章と全同である。その事情を推察するに、『仙芥集』の編集者である定仙の弟子・智照が、初め本冊を記したのち、同じ勧修寺流の護摩の口決で、内容的にも関連する前冊の後半にあたる「八千枚」「不審」を合冊したのが前冊であり、さらに前々冊とも内容的に関連するため、これを一具として同じ「護摩要抄」というサブタイトルを付したものと考えられる。すなわち本冊は編者・智照の草稿ともいうべきものであり、そのためか本文中には誤字が散見され、また抹消線による訂正の跡も見られる。内容自体は重複しているため価値はないが、本冊は『仙芥集』成立の背景を考える上で重要な資料といえよう。

【参考文献】

『称名寺聖教目録』全三巻、文化庁文化財部美術学芸課（二〇〇六年）

『仙芥集』翻刻

〔凡例〕

一、原則として新字に統一して翻刻する。

一、合字は新字による一般的表記に改める。漢数字の略字についても同様である。

一、繰り返し記号について、漢字は「々」、仮名は「〃」に統一する。

一、梵字はローマナイズして記す。

一、脱字の挿入箇所に記された小さい丸は○で表記する。その傍に記されている挿入する文字については、○の下の（　）中に記す。

一、文字の接続を示す「―」は略す。

一、送り仮名に用いる略字・合字は読み通りの表記に改める。（例）シテ、トモ、コト

一、割注は〈　〉で括り改行箇所に／を入れる。

一、声点は、声点が付く文字の後に四声名を（　）で括る。濁音の場合は四声名の後に「濁」と記す。例：平声の場合→（平）、上声の濁音の場合→（上濁）

①【一三函一―二二】

〔表紙〕

kem a

金剛界口伝

仙芥集

〔表紙裏〕

（空白）

〔本文〕

金剛界口伝

√上堂観 初心行者ハ金剛サタト思カ吉也

√無能勝 入薬師ノ忿怒

三摩地ニ一時ハ薬師無能勝也、入釈迦忿怒三摩地一時ハ釈迦無能勝也釈迦成道時ハ挙一指一降魔一者即無能勝印也、此明王ハ胎蔵ニモ

一オ」

アリ仏眼ノ曼荼羅ノ八大明王ノ内ニモ在之一云一云無シト能ク勝カツモノ訓也 弾指ニ二様アリ一ニハ以右頭指一打ッ左ノ掌ノ背ヲ一一ニハ左頭指、中指ノ間ニシテ打ッ右ノ頭指ヲ一也

√maṭ両界ノ種子也 ṭ字ハ金界種子也 ṭ字ハ胎蔵ノ種子也

√弁供入聖無動三摩地一者自身成ルト不動一思也 不結誦印明也 有

一ウ」

承ニハ仕一雖不可然一執(ママ)トリ取
直ス時入ナリ此三摩地一入ル
此三摩地一意ハ為除障碍一
也、
√浄地ハ結界ノ其一也、浄
世界ヲ一浄ハ正ク浄身也
次浄三業ハ正ク消滅ス三
業ヲ一上浄身ハヲホヤウナ
リ外ノ護身ノ浄三業ハ
消滅外三業ヲ一修得ノ
三部ノ聖衆来テ加
守護一加持護念シテ浄ル
外三業一也心内ノ三部ハ
顕心上ノ三部一也顕シ心
内ノ三部一畢ヌレバ礼遍
空ノ諸仏一也観自在、金
剛手ハ遍空ノ諸仏ノ左
辺右辺ニ悉ク在之一
此ノ二菩薩ハ惣諸仏ノ眷

二オ」

属也心内ノ三部ニハ加心ノ
字也云云yu ki中ニモ
右ノ臂ハ観自在、左ノ臂ハ
金剛手ト説ケリ今モ此道
理ヲタカヘス惣諸仏ノ左
右ニ位スル也ト云云胎蔵ノ曼
荼羅ハ色ヲ本トスル故ニ衆
生ノ五体身分十三大院
アタル釈迦院ハ口也文殊
院ハ頂也、蘇悉地院ハ陰
処也、然間コヽニ虚空蔵ヲ
置也、虚空ハ穴ノ義也、
中台ハ胸ニアタル、五大
院ハ腹ニアタル遍智院ハ
三角ノ形ニシテ喉ニアタル曼
荼羅ニモ三角ノ形アルナリ
除蓋障、地蔵ノ両院ハ
左右ノ手ニアタル千手、
金剛蔵ハ左右ノ足也如

二ウ」

三オ」

是一十三大院ハ外ノ形、色
法ニアタル也已上胎蔵界也
金剛界ハ一向衆生ノ心ニ
アタル也 仍五智ヲ本トスル
也 成身会ハ顕ス五臓
六腑ノ坐位ヲ一也 五臓六
腑ハ心ノ住処也 胎蔵ハ
観少シ色法故ニ金界ハ
観多シ心法故云云
√観仏 両目清浄ニ成ス
自身成仏文 仍可見
遍空諸仏一故観仏アリ
√本尊普礼 取リ分キ礼
本尊大日一也 次四礼ハ
四仏ノ礼也 所有ノ微塵
数者我身集ニシテ微塵
成スル故ニ此身悉成金剛
サタト一礼阿閦一也云云
阿閦宝生ハ心内仏也 弥

三ウ」

陀釈迦ハ心外仏也、仍転
法輪成供養義一也云云
√遍礼ハ礼惣諸仏一也ト云云
√四無量観下タノ抜苦与
楽言ハ三宝院ノ本ニハ無シ
勧修寺ノ本ニアリ定
印者妙観察智ノ定
印也 四無量観ハ一向
利他也 末ノ四菩薩ハ四
仏ノ第一ノ弟子ナリ
√勝願者一切衆生ヲ願四令三メント
成二毘盧舎那仏身一也
√大金剛輪已下結界也
√金剛合掌ハ印母故置ク
初ニ一又十波羅密(ママ)ハ修
行位也
√金剛縛ハ五大不二印也
又十地満足ハ円満ノ位也
√開心ハ開心我心也

四オ」

四ウ」

√入智ハ引入無漏智一也
√合智令ムル二堅固一無漏智ヲ
引入也
√普賢三昧耶 此ハ理
趣会也、理趣経ノ初ノ金
剛サタ也 即愚童サタ
也 後ニ得大日一其後被ル〃
云金剛手ト一也 因ニハ金剛
サタ果ニハ金剛手也
√極喜三昧耶 金剛界
生起云(真覚作)九会中
降三世三昧耶会(文)
仰云此料簡尤吉、此降
三世三昧耶形也 尊
形ノ曼荼羅ニモ五古ノ書キ
タリト覚今(オホユ)ノ次第ニモ驚
覚本漏(文)一三形ハ其
尊ノ本漏願ノ形也
√次降三世者即尊形

五オ」

也(云云)同生起云九会
中降三世会者降
三世三昧耶印明也(文)
仰云此義吉、普賢三
昧耶ハ金剛サタ也 極喜
降三世ハ理趣経ノ降三
世品也 蓮華三昧耶ハ
理趣経ノhrīḥ字也 断
尽煩悩一後成自性清
浄一義也 即弥陀転
法輪主也 同生起云是
自身成蓮花部転法
輪主也(ト云云)天台生起
釈普賢極喜降三世
蓮花一云普賢三昧耶
是既ニ有カ無漏智一故ニ我
身反成普賢一故次行
之次極喜三昧耶既
成普賢一故以大悲箭一

五ウ」

六オ」

六ウ」

破厭離菩提之心一故魔
界直二難伏一仍次行之一
次蓮花三昧耶○是印
前既伏魔一了ヌ今可三成
転法輪主一故次行之文
私云普賢極喜、降三
世ハ東寺ノ口伝ヨリ□ホ
ヤウナリ蓮花三昧耶ハ
可同東寺一歟、転法輪ハ
hrih字ノ義故也付印一
通途ノ八葉ノ印ハ向上一也
女人ノ八分ノ肉団ハ向下一也
此印ハ表二男子ノ肉団
向上一上求菩提下化衆生
也
√法輪印、生起真覚云是
違背菩提心一意ヲ摧滅
也文天台生起云次法
輪印既成法輪ノ主ト今

七オ」

可破二乗偏小心一故次
行之仰云法輪印ハ
断尽スルハ三乗一厭離心也
将ス転ト二法輪一立返テ見
仏徳ト一摧ク厭離心一云云
√大欲仰云理趣経ノ宝
生尊ノ段也
√大楽不空身ハ宝生入
愛染三昧地一也大染
智ハ愛染智也能成
大染法ト瑜祇経ニ説ナリ
仰云理趣会ハ不二ノ上ニ煩悩ヲ
見ル仏徳ト一智也、其ノ後ハ
其ノ上ノ利益也云云
真覚ノ生起云大欲印
是二乗発悲一救凡夫一
仏ハ誓テ出度衆生道ニ一也
大楽不空身印、是菩提
大欲円満シテ大慈大悲ノ種

七ウ」

八オ」

成就シテ不空一意也、口云九
会中理趣会者此大
欲大楽ノ二ノ印明也文
天台生起云次大欲印、
破二乗偏小心一可求一乗
菩提心一故次行之一
次大楽印、既悉求一乗
法一令成就衆生一故次
行次行之一真覚生
起中ニ大欲大楽、理趣
会者可然トモ一不覚也
秘義也文面ニ其義不見云云
√召罪摧罪妄執、細妄
執、極細妄執、微細
妄執也文
生起真覚生起天台別不指
何罪云云
√業障除 決定業也
√五相成身

八ウ」

九オ」

妙観察智定印者通
印也 不可数一是ハ蓮花
部ノ定印也 金剛界蓮
花部念誦トニ云付蓮花
部一被作一作法也、付五
部一両界アルヘシ
一通達菩提心二修菩提心
三成金剛心、広金剛、
斂金剛 四証金剛身 五
仏身円満ヒ上一二ハ種子
也 第三ハ三昧耶身也
第四第五ノ尊形也 故
五相成身ハ種子、三昧耶、
尊形ト次第ニ成仏スル儀
式也 其ノ下ノ煩悩断尽ノ様ハ
上ニ顕ス之一一度ニハ難顕一
故也 摧罪者降三世ノ
煩悩断尽ノスカタ也 此等ハ
仏身円満ノ下ノ可断位一也

九ウ」

十オ」

√諸仏加持ハ惣諸仏ノ加持
也 即可当大日加持一也
別尊ノ法ヲ此尊ニ引入テ行フ
時ハ諸仏加持ノ次ニ可結
本尊印明也云云
次四仏加持 次五仏灌
頂ハ宝冠義 次四仏繋
慢ハ荘厳義也
√結胄以印一至ス多ノ処一必シモ
不至一其処一只胸ノ前ニ結
之一也晴レノ供養法ニハ袈裟ノ
下ニシテ結之一也サキノヨロヒ
ノツキメソトツル也
√現智身印 真覚生
起云我前ニ有月輪一々々
中ニ有久成サタ
見智身印同生起云我
前ノ月輪ノ中ノ久成ノサタヲ
了々分明ニ見也 口云九会

十ウ」

中微細三昧耶会者
此現智身、見智身ノ二印
明也文 四字印明是所
見久成サタヲ我身中ニ召入シテ
令喜一也文
次成仏、真覚生起云陳
三昧耶 亦云成仏印 亦云
薩埵印是成仏後、為
陳大日ノ内証外用功徳一
成金剛薩埵身一也文
天台生起云陳三昧耶者ハ
既陳三我成二普賢一故次
行之一 旦同生起云陳三
摩耶ニ為供諸仏一既成
普賢一供仏之事何無
道場一故次入定一建立道
場等乃至観置諸尊一
随観念力一諸尊既有影
現一故次作輪壇一々々已備、

十一オ」

十一ウ」

故次将啓請シ振鈴驚
覚諸尊一上已私云明知
今成仏言ハ指普賢一云成
仏一也雖成仏スト一為供仏一現
金剛サタ一也ト云下住ス之一
仰ノ旨ニ云違フ、　仰云我生
已尽四句三宝院本無之一
道場観ノ中ニ浅青色ノ浅
字三宝院本無之一
√現智身ヨリ至成仏一仰云
上自証成仏也其ヲハ人不
見之一也此ハ化他ノ成仏也
現仏身一為令人見一也云云
本中ニ大薩埵サタト大日
也現智身ノ下ノ如儀側(ママ)
者大日儀則也云云
√九会者
理趣会、降三世三昧耶会、
降三世会、成身会、羯磨会、

十二オ」

三昧耶会、大供養会、
四印会、
一印会、
仰云初ハ六会也、恵果、理
趣会、降三世三昧耶会
降三世会、具此三一給也
摂テ四叶仏意一者、忽可有
表示一取香炉一出庭ニ一天
晴忽降ル雨一仍加之一也ト云云
√道場観中仰云向化他一
故観器界一也ト云云
√宝山印左右手、内縛ナルハ節フシ
九也左ノ大指ノフシヲ右ノ大
指ニテカクスナリ九ノフシ九山也ト云云
√大虚空蔵印十八道ニ少シキ違ストト云云
√小金剛輪印上ト此ト二ノ二ハ供養ノ
義也ト云云
√金剛王驚覚義也
√啓請ハ勧請義也

十三オ」

十二ウ」

百八名讃、此処ニハ金剛サ
タノ讃誦也ト云云

√五部百字明 仰云初行時
可誦五部一後ニハ可誦蓮花
或仏部許一誦ハ蓮花部一此次
第ハ付蓮花部一故也 五相
成身モ蓮花也 誦ハ仏身一
根本故也ト云云

十三ウ」

√羯磨会 仰云諸尊ノ形体
也 四波羅密(ママ)ハ尊形ノ曼荼
羅ニハ大日ノ四辺也 四仏ヨリモ座
位高也 此菩薩ハ大日ノ定ニシテ養
育四仏一也 座四仏ヨリ高也
今ノ次第ハサスカニ菩薩故ニ四仏ノ
次也ト云云 四波羅密(ママ)菩薩ヲハ
名四父母ト一也云云

√金剛利菩薩 金剛王院ノ口伝ニハ
右手ノ剣ヲモテ切ル勢ヲナス也 不ル
爾一義モアリ

十四オ」

√嬉戯歌舞ハ内供養故内坐スル也

√香花灯塗四菩薩ハ非情供養
故坐外一也

√賢劫十六尊ハ現在ノ子仏ヲ壇ノ
四方ニ四々十六ニ誦 hūṃ 字一
分チ置ク也 非仏数ニハ一也
二十天指四処一者誤也 可
五ノ字一四五二十故也

已上羯磨畢

√三昧耶会 大日ノ縛ヨリ起ルナリ

√大供養会 印相従心起ト云
下ニ三宝院ニハ在真言一
彼本云印相従心一起誦
真言一曰 唵縛日羅満駄文
尊形ノ曼荼羅ニハ諸仏擎(サヾ)クル
花一也 従心王大日一満心一法一也
十六大菩薩ヲ以テ自身ノ布字
観□スル也 第十六ノ菩薩ヲハ置
心一也

十四ウ」

√花香灯塗先置ハ之一供
養会ニハ非情供養本也
故色法ヲ先トスル也
√人天意生ノ花者人天ノ意
業ヨリ生花ト云事也一切皆
意業故也
√喜鬘歌舞ノ内ノ供養ニ賛カヘテ
外供ノ香樹等ヲ置テ供養スル也
世間ニアリカタキ物ヲ供スル也外
供ヲ本トスル故也
√六波羅密(ママ)外観法、解脱、
説法ノ三アリ合シテ九也観
法ハ先観法ヲ本シテ入六波羅
密(ママ)ニ一故仍置始ニ一也説法ハ
言語供養也解脱ハ三空也
三解脱門也観法中ニ入ル云
此会ノ供養ハ羯磨会三
昧耶会ノ三十七尊ノ教ニハアマル也ト云云
四印会第一第二ハ可用此印ト云云

十五オ」

一印会
仰云前三十七尊帰四仏々々
帰一印会大日一前ハ大日
徳ヲ分テ置也云云
√摩尼供養已下ハ惣供養也云云
√次仏母文三宝院本ニハ仏
眼仏母文部母義也恵カ母ニハ
用定一也故用仏眼一云云
部母証授ハ此也
√入我々入一身四面者面四方
在之一二手智拳印ニシテ四
方ニ在之一
√字輪観初ハ自性本有
時無点一出利益一時加空
黙一也初ハ観シ置ク心月輪ニ一巻
舒自在也次移シテ身ニ一布
字ス五大ニ一色心不二故也此
即宝体ノ大事トナル也ト云云
已下無別事

十五ウ」

十六オ」

（二行空白）
建治三年二月五日記了 定仙
（二行空白）
一交了　十六ウ」

〔本文〕
胎蔵界口伝
√raṃ 字観火輪印也
広沢ニハ金界ニモ用之一
√唱礼 天台ニハ声明也
唱礼師ト名ク八葉九尊ノ
梵号也 今ハ只以普
礼真言一礼三部諸
尊也 只心ニ念ル也 或
唱礼セヌモアリ任行者
意ニ一也
√九方便者 偈ト真言ト
アリ 真言モ偈ノ意ナリ
梵漢俱ニ挙タル也
√作礼方便印ハ金剛
持印也
√施身方便 独古印者
不動独古印也
一オ」

②【一三函一―二三】

〔表紙〕
kem a
胎蔵界口伝
仙芥集
〔表紙裏〕
（空白）

仰云凡九方便九界
迷ヲ引ニ入仏界一義也
横平等 金界五悔五
仏義懺悔也 智故云云
九方便畢ヌ
√次 発菩提心 仰云用転
法輪真言
仏性三昧耶 仰云用
擐金剛真言一此二印
俱ニ合掌也
√四無量観ハ 法界定印也
√胎蔵ノ三部被甲ニハ入仏三昧
耶、法界生、転法輪
環(ママ)金剛也
√住定印一者法界定印
√定手持杵一当テ〃心一付之一
取ルニ杵一有二様一
一先取杵居直(キナヲ)ル二ハ先居
直テ取ル杵一

一ウ」

二オ」

自初一灑水ノ時ヨリ蓋ヲ不覆一
置灑浄ニ一々々畢テ後
覆之一也 其後合掌シテ
誦偈一也
√付テ地持陀羅尼一地瑟
姹曩ヨリ上ハ旧本ニハ無モ
之一アル也
√金剛手持花者中台
八葉ノ蓮花ノ茎ハ五古也
金剛手者即五古義此五
古ヲ茎トシテ持八葉蓮華一也
尊形曼荼羅ノ八葉ノ中
間アリ五古ヲ指シ出セルハ茎(クキ)ヲミスル
ナリ 内縛五古印ハ茎ノ印也
√以五古一為茎者金剛界
義也 両部不二義也 大
蓮花王ハ八葉ノ印、花坐
印也 五色者五色ノ糸也
界道者サカヒノ義也

二ウ」

三オ」

√大海前キニ五大各別印
アルヘシ 三宝院本有之
√住定印而観心満月輪
上等云注内五古シテ真言
無之 仰云五a也 今此
本ニハ脱ス云云
付秘密八印末ヘニ満足
一切智々遍法界無所
不至、此ノ二ハ大日也 今ハ出
理智二不二大日也
遍法界印ハ無所不至也
秘シテ旦云法界定印
已上遍智院者自初至八
葉摂シテ之云遍智院ト也
√観音院
√多羅 毘倶胝ハ観音ノ
マフタヨリ現ス yu ki 経ニモ
以多羅毘倶胝為二目ト云云
地蔵ハ我院別ニ有トモ観音ノ

三ウ」

為眷属由ヲ示ス也 即
観音ノ化現也
√三部字輪観 己身光明也
以三部諸尊作自身ヲ也
略スル時ハ始ニテ云 a sa va ト次
惣シテ只誦此等也 a 仏部
sa 蓮花部 va 金剛部
√弥勒段 真言ノユキニマ
テハ右ヲ上ニシ其後ハ左上ヘ
也 右上ナルニハ左ヘ転ス左
上ナルニハ右ヘ転スル也
√薩埵院
√金剛鎌 結風輪印
而旋転者カヘスヲ云也
引返シテマヘニモツナリ私云
勧修寺ノ本ニハ注ニ順転スト文
仍不引返但前ニ順ニ転スル
也 三宝院ノ本ニハ順転ノ注
無シ仍引返也

四オ」

四ウ」

√金剛拳 左ヨリ右ヘ打ッ也
仰云サタ院観音院等ハ智
被化現也 観修寺本ニハ（ママ）
諸菩薩印言無
√五大院亦云持明院
般若菩薩五大院中尊也
勝三世ハ即降三世也 降
三世ヲハ儀軌ニ不説一然間
勝三世ヲ降三世ト得意一也
或依師伝一入ル〃ハ降三世一勝
三世トテ別ニ似タル降三世一明
王アリト得意一也 般若菩薩ヲ
五大院ノ五体トシテ而此ヲ一トシテ
云五大院ト一也
√或胎蔵ニテハ云勝三世ト一金
界ニテハ云降三世ト一両部ノ教
令 金輪也 此時ハ依師伝一入ル〃
軍荼利一也 亦ハ金剛夜
叉ヲ入ル〃也 旧本等如此一云云

五オ」

五ウ」

五大院ニハ般若菩薩中台ニシテ
明王四也 此等明王ハ断スル大悲
妄執一尊形也 仍以般若
菩薩一為惣体ト一 文殊師利
菩薩、右ニ剣ヲ持テ左ニ花ヲ
持セルハ大悲妄執ノ花ヲ以剣一
切ル也 不ル満五大明王ニ一義
如何 仰云旦付要挙ル也云云
釈迦院
毫相印 勧修寺本ニ以風一
柱空一（ママ） 仰云難得意一三宝
院ニハ只胎拳也
√無能勝 釈迦門院守
護ノ明王也〈釈迦無能勝也〉
文殊院
光網菩薩ヲハ 光網童子トモ云也
皆童子也 八大童子也 即
文殊化現也 断八風一故
現八大童子一也

六オ」

不思議童子 空入ヨ風
甲ノ背ニ一仰云二頭カ〃メ
テニキリテ其ノ二ノ中間ヘ
二空ヲ入ル〃也
除蓋障院
悲旋潤菩薩 屈恵掌一而
柱心(ママ)一者指ノ端ヲモテ胸ニ柱(ママ)フル也
地蔵院
此院菩薩ハ皆地獄ニ得自在一
菩薩也
虚空蔵院
安住恵菩薩印 八葉印也
其ヲ左右ニ引開テ持也
√憧 法界定印也
天等
自在天子 側(ソハメ)テ頭(ハシヲ)一云者
手ノハシ也 一ニハ手ヲノヘテ
サ〃フル様アリ 一ニハ手ヲカ〃メ
テユヒノ背ニシテサ〃フルヤウ

六ウ」

アリ
摩利支 今次第ニハ如是一
云ヘトモ唯用瓶印一也
√羅刹主 勧修寺本右
手也 三宝院本ニハ左手也
√難陀右上 鉢難陀左上
√妙音天 引琴一二様アリ
一大頭二指外ヘヤル 一大頭
二指内ヘ引也
√吉祥天 多聞天ノ次ニ
アル本モアリ 印八葉印也
金剛王院義也 言 ma hā śrī
ソハカ
√不動明王 サヤノ印加持ノ
間ハムネニアツル也
√示三昧耶 已下如来身
会也 自此已下化他也
√閼伽 不誦百字也
√執杵鈴如金界

七オ」

七ウ」

√鈴後讃ニ拍掌 三宝院ニハ
無シ 金剛王院有之
√示座 向曼荼羅ニ指也
無キニハヲモヒヤリテサス也
√四大護 不用大呪ニ皆用小呪
√無能勝 釈迦無能勝也
八大明王其一也
√讃ハ心略讃也 次偈同印也
√法螺 二大指ヲ開 二頭ハ二大ノ
甲ノ上置也
√取袈裟ニ有二様ニ一右ヲハ
ニキリテ上ニ左ヲノヘテヲ
クヤウアリ 一左右ノ手皆
舒ルヤウアリ
√如来身会三十会印表
三十二相ニ我即成如来也
胎蔵以慈悲ニ為本ニ仍
立返テ普賢慈氏ニ菩薩ヨリ
已上如来身会

八オ」

次住甘露生三昧ニ説一切
説一切三世無碍真言ニ胎
蔵大日也
√無能害力明妃 般若也
√胎蔵智恵般若菩薩故也
今四ハ自身具徳也
√毫相者非釈迦印毫
相蔵ニ只毫相也
√次住定印ニ金界ハ念
珠(ママ)間有此観ニ胎界ニハ
先定印ニシテ観之ニ也
√次取念珠ニ誦金界
偈真言 口伝ニハ a vi
ra hūṃ khaṃ 也 秘シテ云帰
命 a ニ也
√不動尊印真言独古
印一字明也
√散念誦 不動真言下ニ
数珠スリテ仏眼 大日

八ウ」

九オ」

九ウ」

四仏四菩薩不動大
一字
√三々昧耶ハ三部被甲也
初ハ為護身一終ハ為魔
障一也出道場一故也
（一行空白）
健治三年二月九日記之了
定仙
付此界ニ一転明妃者胎蔵
普供養也
√普施明妃者天等通
用真言也何レノ天ニモ用之一
別シテ真言ノフルハサル事也
無ニハ通シテ用之一也
√諸人者指ス諸天眷属一
也云云
（以下空白）

一交畢

十ウ」

十一オ」

③【一三函一―一三】

〔表紙〕

kem a

両界口伝 并駄都口伝 意教上人

十オ」

仙芥集

〔表紙裏〕

（空白）

〔本文〕

三宝院駄都次第口伝
意教上人
両界口伝 両界作次第
胎蔵儀軌大綱

其外道場観等
√五大明事　√無所不至言事
（一行空白）
駄都法口伝
付道場観一注云花蔵
世界也ト有人云上人仰云
八葉白蓮花ハ亦花蔵
世界也 故此注ハ即
注簾文一也 注ニ口伝アリト
者ヤカテ指テ此義一口
伝ト云也 別ノ口伝ニハ非ル
也トモ云 又別人云上人ノ
仰トテ人ノ申サレシハ此ニ
a va ra ha kha ノ五字ヲ
カク本アリ 其ヲ種子トシテ
花蔵世界ハ住セリト
口伝スル也トモ云 此法中ニ
含四種法事
√上人ハアマタ法ヲ含此法

一オ」

中一メリト仰ラレキ其
事ヲ問ニ有人ニ一云ク爾也ト
或時出善風一発雲於
四州等請雨経法、
又如来入此宝生之三
摩地已下皆隨衆生
願示宛足ニ至マテハ五大
虚空蔵法、又光中雨
宝蓮花々中有声説
微妙法示法花法、
又此光遍照スル奈利之
底等一光明真言法、此
等前後者如意宝珠
法也 付此法一道場観ノ
印ノ事
√上人仰トテ有人ノ申サレ
シハ妙観察智ノ定印
也 而モ二頭指ノ二ツカサキ
ヲ開テアナニシテ三弁

一ウ」

二オ」

宝珠ノ形ニ結スフ也ト云云

√両部如常礼仏ノ末ノ両
界ノ言也 誤テ伝法ノ秘
印ト得意一後此ヲナヲス云云
次入我々入後本尊加持ニハ
仏眼等略スル之一雖爾一上人ノ
仰ニ云入我々入ノ後、正念
誦ノ後、字輪観ノ後、此
三処ハ上ノ如ク一々ニ丁寧ニ
可結ムスフ一略テ下ニハヲケル也ト云云 一切諸尊法皆々
可シト如此ナル一云云

三種加持事

√本尊三種中宝光
虚空蔵殊甚秘ヒ也
宝生亦入宝部三摩地
給也ト云云上人仰也 私云
付合ス法印御房之仰ニ一云云
√付本加持有人上人ニ

二ウ」

申テ云ク世間ニハ勧修寺也
散念誦始ニ可シト結ヒツクス尽
潅頂印一申御如何仰
云以此作法一為テ本ト一四処ニ
悉ク可結尽之一也ト云云
大精進如意宝珠印
事 有人云外縛ニテ以
禅智一入縛内同シ菩提
心論印一也 印ノ説文如ク此一
見タリ 雖爾一口伝ニ先金
合テ以二頭指一作宝形ニ一
以禅智一並立テ〃二頭指ノ
宝形ノ下ヘサシヨスル也
中ヲ剱形ニテハ不ス作一唯
並フル也 頭ノ下二大指ノ上ニ
アナアリ 此ト左右ト合テ
三弁宝也ト云云
√付四処本尊加持一第一ト
第四トハ列仏眼加持一第二

三オ」

三ウ」

第三略之一第二本尊
加持下列釈迦真言
大精進如意宝真言一三
処ニ略之一此等ヲ奉ルニ
問上人ニ一仰ニ云ク仏眼モ四
処ニアルヘシ釈迦大精進モ
四処ニアルヘシ丁寧ニ可誦
結一也今ハ旦ラク惣ニ略之一也ト云云已上駄都口伝

√両界口伝
有人云金界ノ五相成身
等ハ従因至果義也果曼茶羅
羯磨会以後ハ従本垂
迹義也已上上人仰趣也
一印会四印会如何同人云
此二ハ為本尊加持一列タル
ヲ世間ニヤカテ一印会ト
申ツケタリ一印会ハ仏
身円満也ト仰ノ給シヤラム

四オ」

四ウ」

引九会密記一可ト見一云云
私云勧修寺ニハ別在口伝
胎蔵界ハ従本垂迹ノ面
也中台ノ大日三部ニ立テ
下ルル也以垂迹一為スル面テト一
故ニ号ス因曼多羅ト一
胎蔵ニ有従因至果義一
者行者ノ方ニ付テ云也
取リ付テ一々ノ諸尊ニ一行
者修行スル也一門法界
義也
付胎蔵界一行大日一行者ハ
一門法界ノ行人也従本
垂迹ヲマヌル也ト云云
一々ニ上人仰也ト云云
又有人云上人両界ヲ取
合テ人ニ仰ノ給シニハ従因
至果ノ行者経テ五相成
身ヲ一成一印会大日一畢テ

五オ」

五ウ」

趣化他一時ニ現胎蔵曼
多羅ヲ一也故ニ号大悲
胎蔵ト一也ト云云

已上両界口伝

有人云常ノ仰也此等ノ次第
ヲ〃ヤケ事也九会密起(ママ)
三部秘尺ニ見タリ以其
為本一也又上人ハ覚 vaṃ
上人ノ両界ノ沙汰ト云物アリ
以其一大旨ヲ人々ニ被仰一也ト
云云

√胎蔵九重月輪観事

常喜院生起本之中
小外次第ニ大也是九識
也我身中八葉蓮花ノ
上ニ在 a 字一反成月輪一
其ノ月輪ニ在九重一也生
起云彼月輪形如円珠一
若如円座一云云私云如円

六オ」

珠者マロニテ可重々一歟
如円座一者マトノエノ如ナ
ル歟有人云上人之仰ニハマト
ノヱノ如ク観セヨト云云
其中一ハ円テ後々ハマトノヱノ
如ナル歟

√両界式次第

小野
延命院金剛界次第ハ
不空金剛界儀軌蓮
花部念珠(ママ)次第阿弥
陀儀軌也専依上二次
三摩地ノ儀軌次大師
御作金界次第依此等也
胎蔵ハ依青龍儀軌一作法全
智証請来也雖他門依此也
広沢
金界ハ法皇ノ作也如小野
依四本書一也

六ウ」

七オ」

胎蔵hūṃ字ノ次第ヲ用
大師御作也
√胎蔵次第事
青龍胎蔵儀軌上ニ遍知
印上ニ列ヌ下如来身会、
一切平等開悟 普賢菩薩
如意珠、慈氏菩薩、三世無
閡ケ力明妃、無能害力明
妃、大海真言、金剛手
持花上 次云以妙蓮花
王一持於花蔵界一金剛ノ
印遍ク厳レリ中ニ羯磨金
剛アリ 其上ニ大蓮花アリ 妙
色金剛ノ茎クキナリ八葉ニテ具
鬢蘂ヒンスイ（上濁）一衆宝自荘厳トモ
開敷シテ含セリ果実一於彼ニ一
大蓮ノ印ヲ大空点荘厳セリ
十二支（上）生（上）句モ普遍セリ花
台ノ中ニ一常ニ出ス無量ノ光ヲ一

七ウ」

百千衆ノ蓮繞レリ其ノ上ニ
後観想セヨ大覚師子座ヲ一（ママ）○
已上 次五色界道真言
上所居者 下能居尊 其ノ中ノ胎内ニ大日ハ
曼荼羅ヲ観ス中台ノ八
葉ト見タリ
次観シ列スル十三大院一也
一東遍知印 二北方観自
在 三南金剛手 四依テ涅
里底方ニ一不動如来使
五風方勝三世 六四方ニハ四大
護 七初門尺迦文 八第三
妙吉祥、 九南方除蓋
障、十勝方ニハ地蔵尊 十一龍
方ニハ虚空蔵 十二及蘇悉
地 十三護世威徳天 次第ニ而
分布セヨ 已上取意 已上
観念也 能居九尊事也 十三大院也
次ニ浄治真言 次不動大

八オ」

八ウ」

明王 次大鉤金剛鉤也
或ハ三部心ヲモテ請セヨト云云
次除障ニハ不動ト文 次
示セ三昧耶ヲ一 速ニ満ッ無上ノ
願一 令テ本真言主ノ諸
明ヲモ歓喜セ一 故ニ無印真言小野次第
入仏三昧印真言ト文 次閼伽 次奉花
座小野次第ニハ此ニ不動尊示座アリ儀軌無之
次金剛手 次怖魔 次
大界真言 次略説真言
四方四大護ナリ 次不可越
守護ノ真言無能勝 次相向
守護 次塗香 次花鬘
次飲食 次灯明 次虚空
蔵明妃 次云毘盧舎那
位及行者ノ所居ニ皆有
海会衆一 囲繞ス瑞厳ノ
位一 列其真言小野次第等略之
次遍知印

九オ」

一切仏心言
虚空眼明妃言 一切菩薩言
√次観音院 次文殊院
次除蓋障院 次地蔵院
次虚空蔵院中出現智菩薩アリ
次金剛手院 次持明院
次釈迦院 次外金剛部院
諸人普世明妃マテ列之已上
次三部四処字輪観
次菩提心菩提行 成菩提涅
槃真言列之
次住法界平等観真言
次秘密八印 次百光王ノ儀
式、次加持句真言 次
奉送偈并真言如シ金剛
界未列之一
私云延命院次第 大師
hūṁ 字次第広沢秘密
八印在アリ始一 儀軌在末一

九ウ」

十オ」

相違如何 答儀軌中
道場観時先観中台八
葉一次観ス自在之婇
女仏波羅(ハラ)(ママ)密妃 次曼
多羅観ノ時能居先観彼
中胎内一次列十三大院一
其後、正説印明一時始遍
知印一終(ヲハル)外金剛部一乃シ至ル
秘密八印一仍小野広
沢次第順ヘテ道場観ノ
次第ニ一取テ末ヘノ秘密八印一
始ニ列之一也ト可料簡歟
√尋云四重院者先内院
外三重院也 常喜院
生起如此一是依大日経疏
意一也

十一オ」

第一重内院自性壇或云成就壇一
八葉九尊座シ給十九種(ママ)
金剛等ヌイ等ニ座也 八尊ハ

十ウ」

唯与大日一同位ニシテ無各別一
唯大日ノ内証之八徳也
自性法身也
第二重院秘密壇受用等身也
四大菩薩四仏等諸院多在之一
第三重大悲壇化身釈迦院文殊院
第四重嘉会壇外部天等也
天台ノ胎蔵次第ニモ十三大
院在外三重院一〇(是モ依疏意歟)常喜
院生起云胎蔵軌説ク於
四重院一内院有五色界
道一外三重院不爾一只結
五古印一各誦吽字一文
然ニ青龍軌ニ分明ニ不見一
軌云四方ニシテ普周匝セリ一門
及通道アリ金剛印遍ク爰
中ニ羯磨金剛アリ已上此
文殊ニ四重ノ院トミツヘシ
金剛印遍厳レリト云フ常

十一ウ」

喜院以此文一釈之一給歟
大師ノhūṃ字次第広沢ヲノ
ヤウニシテ委ク不分四重院一
惣相ニ十三大院ノ諸尊圍
繞スト列給也 延命院胎
次第ハ五仏四菩薩座八葉一
蘂鬚スイヒンニヌイナリ無量ノ諸仏菩薩
等座給 枝葉ニ外部ノ浄
居等座スト云不依疏意一
定メテ別ノ軌ニ依歟 不空ノ
梵字ノ儀軌ヲ可見一等云
√三部字輪観事ヲ常
喜院生起ニ釈スルニ二十八字ト
云ヘリ小野ノ次第ニハ三十ノ字也
如何 答私青龍軌ヲ見ルニ
二十八字也 末ヲ列スルニヤラ野羅
攞ラ○捨灑娑賀カ（平）已上
小野次第ニ吃灑ノ二字アリ
依ルソ何ノ軌ニ一耶可尋之

十二オ」

√有人答云峯公門卿律師慈救ノ
呪ハ大日経ノ息障品ニ在之一
其外不スト見一云私云誤也
小野次第ノ不動尊示座ノ
処ニ在之一亦披青龍胎
蔵軌一タシカニ在之一云已上
火界呪ハ持明院ニ在之一
√灌頂金剛前胎蔵後事
私云金界道場観ハ以前ノ
五相成身ノ仏ヲ為令座一歟
勧請シテ修生ノ仏一為令座一歟
答披クニ覚vaṃノ金剛界ノ沙
汰ヲ一云次ニ道場観、々々々
已前ハ正報此ハ依報国土、
此ニ有リ自他一自ヲハヤ遣ル前ニ一
此ハ明ス他受用方ヲ一也ト云
私云此上人意五相成身ハ
能居ノ仏此ハ所居ノ土也 以テ
以前ノ仏ヲ令ル座セ一土ニ一也但シ前ハ

十二ウ」

十三オ」

十三ウ」

自受用成道也 此ハ向テ衆
生化度ニ一荘厳シ国土ヲ一圍
繞ス眷屬ヲ一雖モ前ノ仏ナリト一□タテ
他受用身ニ一住スル国土ニ一也ト得
意一也已上此上ニ勧請シテ修生ノ
諸仏ヲ一全ク令メテ住セ一前ノ自ノ国
土、自ノ仏ニ一新古一体トナス也
依テ之ニ一金剛界ノ次第ニモ観シ
置ク道場ヘ修生ノ仏ヲ請スル
儀式少々見ル也 常喜
院ノ生起云是ハ無始ノ理
具曼荼羅ヲ今始テ覚
知シテ事相ニ観シ置ク也 此則
始覚新成ノ曼荼羅也
勧請ノ時ニハ新成ノ曼荼
羅ニ久成ノ仏菩薩、明王、天
等、一々ニ来テ入住シテ成一体ト一
也已上又勧修寺ノ大事ノ書ニ
五相成身ノ処ハ能居道

十四オ」

場観ハ所居ト注ス方々不
相違一也云若爾ハ胎蔵ノ
如来身会ハ与ト金界ノ五
相成身一同也 如来身会ノ
後将入道場観ニ一始ニ云ク爰
降シテ仏ノ国土ヲ一奉事セヨ諸ノ
如来ニ一諦ニ観セヨ香水海ヲ一
大海ノ真言曰已上修生ノ仏ノタメ
ト見タリ如何 答一ニハ厳
降シテ心仏ノ国土ヲ一奉事セヨト
心ノ如来ニ一云事也 一云心ノ国
土心ノ仏ニ修生ノ仏ヲ勧請シテ令
住一故ニ奉事ストト修生ノ如来ニ一
見云モ不ル苦也云云

十四ウ」

√覚 vam 沙汰云道場観者法
界宮密厳国土已上
又云前五相成身ニハ大曼
多羅ヲ為本体ト一悉収余
法ヲ一此ノ道場観ノ時ハ三昧

十五オ」

耶曼タラヲ為シテ主ト一尽一
切ヲ一也已上私云五相成身ニハ
月輪蓮花遍法界一道
場観時種子三形、成ル
尊形一然間如此尺之一云ニ
又云九山表両界ノ九尊一八
海表性徳ノ円満一金亀ハ九
山ノ下ニ□タテ有リ云ニ又云
三昧耶会○此会印大旨
従縛一生也
羯磨会印大旨従拳一生也已上
道場観壇上心上事
√有人云光明真言法ハ道場ヲ
心ニ建立ス余法等壇上ニ観ス
金剛界ハ両種中ニ何ノ耶
意教上人仰云心ニ建立スト云ニ
同人云胎蔵可准之云ニ
私云勧修寺ノ相承ノ義ニ相
叶云ニ胎蔵云覚 vaṁ ノ胎

十五ウ」

蔵ノサタニ云我心壇ニ建立
ma ta ra ヲ一也已上サタニ云金
界無驚発地神事
何師云金界虚空 ma
ta ra 也天配之一胎蔵地
配之一以之一思之一已上
√加持成仏事
有人云意教上人常仰云
憑如来加持力一成仏也我
心上ニ観諸尊一勧請シテ修
生如来ヲ一令冥会也依
諸仏加持力一我即身成仏ス
新古不二故也ト云ニ
疏云加者往来赴入ノ義
持者摂持不散ノ義已上
√五大明事
青龍胎蔵軌如来身会ノ
前ニ以五大明一布字ス自身ニ一
○観身同如来一後念満

十六オ」

十六ウ」

足句帰命阿鑁覧含
欠已上大師hūṃ字胎次第
満足明出無点五大明一也
√無所不至真言事
青龍胎軌出秘密八印畢
云不(ママ)所不至真言曰
(2)帰命仏部阿阿暗悪已上
(3)大師hūṃ字胎次第出秘
密八印一々刻満足句一
外五古印五字明
√次出無所不至言一大恵
刀印 帰命阿已上
√現図曼陀羅有千手
金剛蔵王菩薩一両界式
無之如何 有人云現図
曼陀羅ニ御ス仏菩薩ヲ式ニ不
行一事多シ此両菩薩不御一
也 広沢ノ次第ニハ院々ノ
眷屬ヲ略シテ行之一又偏(ママ)
知院(ママ)モ為ニ人一一院ニ一尊
許被タル行一本アリト云云
(空白)
弘安元年十二月三十日記之了 定仙
(空白)
一交了
(以下空白)

十七オ」
十七ウ」
十八オ」
十八ウ」

④【一三函一―二四】

〔表紙〕

kem a

瑜祇灌頂私抄

仙芥集

〔表紙裏〕

（空白）

〔本文〕

瑜祇灌頂不審私拾記之

√先付十五尊面（ママ）一胸ニ在大
日一文以大日一為スレハ一尊ト一十五
尊不満足一以大日一為スル五ツト一
時十五尊満足スル也、
yu ki 灌頂ト外題ニ書タル
巻物ハ興然記也 受大智（仮名）
房喜俊（実名）一時ノ日記也、
其中云心為遍照尊文
結外縛五古印
誦 vaṃ 一是五仏也
已上
注ニ誦 vaṃ 一是五仏也文何
以 vaṃ 一為ス五ツト一十五尊
満足スル也云云
（四行空白）
√付内作業灌頂作法

持真言行者ノ下ノ注云
以空智ヲ一浄ム自身ヲ一五古ナリ文
空智者云フ五古ノ印ヲ一也、
以五古印一浄ムト受者ノ
身ヲ一云事也
五古ナリト者空智者五古ナリト
云事也 口伝ヲ意ヲモテ
如是一得意一也云云
（一行空白）
根本ノ命ハ金剛ナリ文一日光房抄義云
序品ノ三十七尊ハ根本ノ三十七
尊故文意ハ三十七尊ノ命ハ
金剛サタ也ト云事也
同抄又云愛染王ノ此経ノ
根本故、命金剛者冒
地心品也文意ハ愛染
王ノ命ハ金剛サタノ真言
也ト云事也 金剛サタ冒地
心品ノ真言ニ曰ク 唵嚩

一オ」

一ウ」

二オ」

曰羅句捨冒地止多
吽文 今言ニ縛曰羅
吽者略中間ノ句捨冒
地止多ノ句一也云
（以下空白）

√釈輪以為座文
日光房抄云安云釈輪以
為ストイハ座一天帝釈ノ一ノ名ナリ因
陀羅此ニハ云帝一明ハ曰ク
ca kra文意ハ釈輪者
天帝釈ノ一ノ名也明ヲハ ca
kra ト云也ト云此義ハ帝釈也
又云大師云行法記 ca kra ハ
化身ナリ従リ腰一下モ成ス金
剛座ヲ一文 ca kra ハ化身者
釈輪ヲ ca kra ト云也 此釈ハ
釈輪者 釈迦即反化身
也ト云事也 以反化身釈迦一
為座一義也 以釈尊一

二ウ」

為座一々上有輪一義也
注云堅スル膝ヲ法界座ニシテ水
印ナリ可訓 印ノ異説也
水印者水輪ノ印ト云事也
即八葉ノ印也 堅膝一
者結跏趺座ニ坐スル也
此座即法界変満ノ坐
也 八葉ノ印也ト云事也
此注ハ釈輪ヲ釈迦ト得意一
時ノ注也 口伝ノ印ハ釈輪ヲ
帝釈ト得意一時ノ印也
其故ハ寛信法務ノ注云
善法堂有金剛界曼
多羅此名釈輪文 以テ下帝
釈ノ輪円具足ノ曼陀羅ヲ上
為ストト座一云事也 善法
堂ノ曼多羅ハ帝釈ノ曼
陀羅ノ故也 此釈ノ時ハ可用
転法輪ノ印一云

三オ」

三ウ」

仍注ト口伝トハ印ノ異説ヲ
注也
喜戯為鼻端文内ノ四
供養ノ中ノ喜菩薩也
理供養ノ経云裏書金
剛喜戯菩薩此レニ摂供
養ノ菩薩一文摂四供養也
√観水印文観自在ノ水
印ト云事文水輪印也
即八葉印也
（以下空白）
√心為遍照尊文以大日一為
五仏五ツニカソウル也十
五トナル也
（一行空白）
√相好金剛日文是南尊
光菩薩也
理供養裏書云此宝
部金剛光菩薩是一切

四オ」

如来自性光明文
（空白）
印可
普通ニ有一一常五古也一直立ヘ利有情一二帰本有理時鉤之一倶ニ言ハ vajra 也
最秘有云第一トコ印
hūṃ hūṃ マテ誦之一五也
次三古印是モ hūṃ〃マテ
可誦之一第三非常五古五古印
加ルカシラヲ頭ヲ也
一々ニ言ヲ日記ノマ〃ニ可誦之一
能海記在之但第一第二
能海ハ真言ヲ受落ス定仙
定祐僧都ト願上人両人トノ
重□テ受之一願上人ト
定祐トノ辺ニハ五印ノ印ノ
下ノ真言ノキリツキ等無之
定仙自三方受之三方
者卿アサリ定祐能海

四ウ」

五オ」

五ウ」

六オ」

也 願上人殿ノ法印ハ唯
物語リニ談スル也 仍永仁
四年九月二日釈迦堂ニテ
同法四人ニ授之一皆具
足シテ授之一也云云
阿闍梨位印明ハ乍三
最秘々々也 五古ハ乍二
普通也云云
問内作業品ニ説十五尊ヲ一
何表示乎
答小野理灌頂式ニ云
十五尊者因位ノ三業
十二因縁成ル二一仏法身ト一
義也云云
（以下空白）
（空白）
永仁四年定仙記之一
後追少々記加之 但
有誤歟 後学可被
直之 此灌頂輙不可与人
云云
（以下空白）

八オ」

六ウ」

⑤【一三函一―二五】

〔表紙〕

kenn a

ho ma 要抄

仙芥集

七オ」

〔表紙裏〕

七ウ」

指環事

作壇事付檄五色

破壇事

〔本文〕

指環事

瑜祇経云（内作業灌頂第十一品）

又法取青茅　作一旋茅環
釧於進力指　能除衆不祥
釧於忍願節　能降一切苦
釧於禅智度　能奪那延力
釧於戒方指　能令本尊説
授与一切願　及成就一切
釧於壇恵節　親近諸悉地
一切仏歓喜　不違本誓力
指環加持真言者仏部心
等三部真言ヲ以テ加持ヘシ
仏部尊等ハ仏部心真言ニテ
加持ヘシ三七反　蓮花部尊
等ヲハ蓮華部心真言以テ加
持ヘシ三七反　金剛部尊
等ヲハ金剛部心真言ニテ三七
反加持ヘシ　護摩入時炉

「一オ」

積薪ニ以前也
自塗香中入ヘシ指環　師
口伝云以三古印ニ加持之ニ
以指環ニ居左ノ掌中ニ加持
之ニ也（三七反）加持シテ即貫左無
明指ニ真言ハ掌ノコマニハ金
剛部ノ真言（云云）

√作壇作法（塗壇事略之）

先橛立事
金剛橛以弁事明可打之
佛部難勝ノ忿怒王
唵戸魯々々栴荼利摩
登耆娑婆賀
蓮花部カヤキリハ
oṃ a mṛ to dbha va hūṃ pha ṭ svā hā
金剛部軍荼利
唵阿密栗帝（ミリティ）吽泮吒
橛打真言
唵戸嚕々々吽泮

「一ウ」

「二オ」

増蓮闍梨云上件作法
若無其縦者只以鍬
印泥印糸印三ケ之
印明入壇之後着座
最初加持之然後入作
法也
或口伝云作法了金剛口
陀羅尼ヲ三七返可読云云
鍬印 金剛嚩禅智進力
並竪真言曰
oṃ ni kha na va svā ta svā hā
泥印 馬頭印也 真言曰
唵阿密里合都納婆合縛吽
発吒娑婆賀
糸印 五仏印也外五古真言曰
唵嚩曰羅質多羅三摩耶吽
胎云 ra raṃ ka ma ha
已上作壇作法畢
次破壇作法

二ウ

観大壇中有a字此地輪種
子也 此字反成大壇法然道
理所作也 而今有haṃ字成
大風輪即破地輪所謂成者
必壊也 即頌曰
諸法従因起 如来説是因
此法随縁滅 是大声聞説
三反誦了取火箸ヲ一引
破ル○（炉ノ口ヲ）様ニスルナリ
○（本説云独古ヲ炉ノ口ヲ／打破ル様ニスルナリ）
正応二年十二月八日従忍済
真慶両人作法中為行
事為行事抄出之
定仙
引糸事并立橛事
中納言法印云作壇初誦立
橛真言引糸時初結五古
印誦五色界道真言一
加持糸也 引糸時同誦五

三オ

色界道真言
引糸始、自丑寅角始之一櫪ノ
クヒニハ不付一下ノ花ヒラノ
上ノキサミヨリ始也タツミノ
櫪ニ至テ同キサミニ付テ上ヨリ
糸ヲ廻シテ五マキシテクヒ
ヨリヒツシサルノ櫪ノクヒニ引
付テ五マキシ下シテ上ヨリ
糸ヲコシテ戌亥ノ櫪ニ至テ
櫪ノ上ノハナヒラノキサミニ付テ
越シテ上一返テ至丑寅角一ソコ
ニ留也前ノ櫪ハ如鳥居一也
小野広沢多分如是
引之云云
常陸法印云
故三河僧都モ如是引之一
但前ノ櫪二ハ五マキマテハ
ナシ三マキ也地体ハ自中
間ノ鬼目一始之一ヘシ然而トモ

三ウ」

四オ」

其レハアマリサカレリチト
アケテ引始也已上
了一上人云醍醐ニ雖如是一
不引之一勧修寺ヲ見シニ
同無此義一高野ニシテソ
時々見シ之一定人ノ私引様歟
有人云阿性上人弟子法印云故阿性
上人モ唯自櫪頭一引之一
非如鳥居一
一如上人云勧修寺ノ殿僧正
御房ノ御持仏堂ノ内見
セシニ雖非如鳥居一自
櫪頭一引之一也
定円房云通海法印弟子
醍醐辺ニシテ如鳥居一引様ヲ
不見一云云
了一上人云願上人モ自櫪
中間一可引始之一自天地
中間一引之一ト云但常

四ウ」

行事ニハ無其義

私云寛位法印用此引橛

歟 仍此人云用此引様 歟

又小補律師、用此引様 歟

中納言法印等用此義 故云

御流様

中納言法印云丑寅ノ角ノ

橛ノハナヒラノキサミヨリ

辰巳ノ角ノ橛ノクヒニ引付テ

上ヨリ越シテ未申ノ橛ノクヒ

ニ付テ越上 戌亥ノ橛ノハナ

ヒラノキサミニ引付テ越上

返テ至丑寅角橛ニ 花

平ノキサミニ付ケテ留也カ

タサカリニテ見ニクシ 御

流ト云ハ人ニカワレルヲ宗ト

セラル〃トミヘタリ云云

従橛中半引五色事

√一如上人云閑見レハ日記 花

五オ」

蔵院ニ有此事 也

寛助僧正 ─ 永厳僧都

　　└ 二品親王覚法

　　　└ 三品親王聖恵

　　　　└ 花蔵院

　　　　　└ 寛暁法印

寛暁法印云於金輪法与

孔雀明王 同習也 仍唵

ホロムマユラキランテイソハ

カト謂也 返テ亦孔雀明

王与金輪 同ト習也 仍

唵マユラキラムテイホロム

ソハカト誦也 付之 有灌頂

秘密灌頂也 寛暁云覚法

親王無御伝 仍御流ハ傍

也 我流正流也云仍御

室ニフセイセラル八十合

皮籠ヤキスツ云其灌頂

五ウ」

六オ」

者金輪ヲ習不二大日一也
以此金輪為本尊受
瑜祇序品印明也
灌頂一明ハ秘密灌頂明也常ニハ
印ハ理塔也 明一字
広沢ニハ無ト云也 内々有
花蔵院御室不伝之一
御一道場向南一仍壇
向南一也 此時自丑寅角
橛一引五色一橛中ノキサ
ミヨリ始之一正面ニテ如鳥居一
上ニ引之一金輪出宝部一
不二大日也 重南一上糸一也
然ニ中ヨリ引事ハ橛ノ半已
下ハ入ルト金輪際一習也 上ハ
与須弥頂一斎ト習也 仍
半ハ地斎也 引地斎ニ一
結界スル由也 無別子細一也云云
常橛ハ須弥頂ニ引由也

六ウ」

寛暁法印流伊勢国
ニケテユイテ在之一聖教ヲ
ヤリスツト云ヘトモ唯ヲモ
テ許ニシテ内云在之ニ一歟仍
無□□一御流秘密灌頂在花蔵
院一云云
願上人云引五色糸一事ハ
自鬼目一可始之一天地ノ際
也 際者中間也 糸ハ天地ヲ
サカウ 橛ハ四方ヲサカウ 天
地四方ヲサカウ合六方也
前ハ為ニ取鈴一如鳥居一
マキ上ル也 小野ニハ仏供ニ
サヘシカ為ニ橛ノクヒニ引
也云云
了一上人云醍醐ニハ必自リ橛
頸一マトウ也 非ス如ニ鳥
居一又必自丑寅角一引
之一也 御修法等ニモ都無其
義也□ハ自下一引廻也

七オ」

七ウ」

○（如鳥居引事ハ広沢ニスル事也 御修法等ニモ都無其義一也）
一如上人云広沢ニモ私事也
勝宝院花蔵院流ニハ都
無シ如鳥居一引コト之一皆橛ノ
クヒヨリ引之一也大聖院ノ
花形壇ニモ唯クヒヨリ引
廻之一如鳥居一不引之一御
室ノ御流ノカタサカリト云事
モ都無之一也
√有人云阿性上人弟子阿性上人初
心人ニハ先鍬ヲ清浄ニ洗ヲ
ワセテ結誦鍬印真言
次至座ノ処一向地一結誦泥
印真言然後取古一塗
爐一橛立橛打糸引
等作法可准知一
後心人前立不作此等作
法一行法初礼盤上結
誦真言一云云

八オ」

已上ノ勧修寺
常陸法印云故僧都
定祐橛立橛打糸引
等無印真言一唯立之
引之引糸一次第、従丑
寅角一始之一糸ヲ毎橛一
下ヨリ廻之一也鳥居ニハ
七マキ也此ハ四方橛無
糸上下

八ウ」

已上勧修寺
醍醐ニハ立橛一時結誦地
結印真言一立橛一○（次第如此自丑寅方始之一引糸一時
ハ誦五）色
界道真言一無別印一糸ハ
自下一廻シ自上一廻ス二様
也多分自上廻之一此モ
無糸上下一也
已上醍醐
大蔵卿阿闍梨ハ登礼

盤一行法始二結誦鍬
已下三印言一糸ハ自上
廻之一自丑寅方一引之一
以此等次第一私作廣略二
作法一
先○（広作法鍬ヲ清浄ニ洗可結誦印真言次塗炉次）至五
処一可結誦泥
印真言一次塗炉一次
立橛一真言可誦之一次
打橛真言可誦之一次
結五古印一誦五色界
道真言一次可引糸一自
丑寅方一引之一越糸一時ハ
上下可随意
次略作法 登礼盤一可
結誦鍬已下三ケ印
言一卿阿闍梨随此説
了一上人云護摩ヲ行スルニハ
必用鍬等印言一也夕〃

九オ」

九ウ」

ノ行法等七日トモ二七日トモ
行スルニハ可用作壇作法一
唯誦大金剛輪真言一
三七反立橛一也誦五色
界道真言一可引之一如此
作法等ハ依意楽一可為此一
又旧作法等有之一非ニハ
七日二七日等ノ行法ニ一不
誦橛真言一不誦五色
界道ノ真言一唯立之一
引之一也云云
正応二年十二月廿八日記之
定仙云云
（以下空白）

十オ」

十ウ」

⑥【一三函一—二六】

〔表紙〕

keṃ a

homa 要抄行海

仙芥集

〔表紙裏〕

行事

八千枚

不審条々

〔本文〕

作壇法在広略二法

広法ハ如日記「可用略法」

卿阿闍梨随此説「登礼盤」

可結誦鍬已下三ケ印言

鍬印金剛縛禅智進力並竪真言曰

oṃ ni kha na va svā na svā hā

ニ キヤ ナウ ハ ソハ タ ソハ カ

泥印 馬頭印也 真言曰

唵阿密里合都納婆合嚩

吽発吒娑婆賀

糸印 五仏印也外五股 真言曰

唵嚩曰羅賀多羅三摩耶吽

胎云 ra raṃ ka ma ha

アラ ラム キヤ マ カ

已上作壇作法畢

神供ハ三度也 初ハ開白夜、中ハ

中日ノ夜、後ハ結願ノサキ

ノ夜也 醍醐如是「良勝

流如是」 此流モ爾也卿阿闍梨説也

羯磨加持

結羯磨印「先順三反 次

逆三反 已上六反 作法ハ

七反文 雖然」行事如是」

卿阿闍梨説也 醍醐如是

芥子加持

卿阿闍梨説云加持シテ後、

一度ニ取テ爐ノ後ロ一度、後ロノ

左右ヘ一度ッ〃投也 文ニタカ

「オ」

「ウ」

ウトイヘトモ如是シツケタリ
ト云已上
サ〃メノ仰云自艮ノ角次第二
廻リテ投之終リニ上下ヲハ
投爐ニ也同良勝流
積壇木事
佐々目仰云仁和寺ニハ五重
歟六重歟ニ積之也
小野ハ三重ニツム也
同上ヘノ六枝ヲ積ム事ハ従
左積ム歟 従右積ム歟
仰云従左積之也ト云云
器物等左右ヘ取置事
√前供養ノ阿(ママ)伽塗香華鬘ヲ
トリカサ子テ右ノ花立ノ傍ヘ
ヲシヤル 花垸モトリカサ子
テヲシヨセテヲク也ヲキ処ノ
サハクリナシトモカクモ置也
供シタル花ヲモトリアツメテ阿(ママ)

二オ」

伽等ニ入ル〃也次ニハ火舎ヲトリ
テ左ノ花立ノ傍ニ並之次芥
子加持次五古ヲトリテヤカテ
鈴ニトリ具シテ左机ニ置ク切花ノ
ソハニ置之次金剛盤ヲ行
者ノ前ヘ〃引ヨセテ其上ニ取
乳木置之本ヲハ行者ノ前
ヘ〃向也次取右机塗香
置壇上右也金剛盤次乍ラ花
垸花鬘塗香阿(ママ)伽品ノ
字ノ形ニ置之
○塗
阿(ママ)○
○花
丸
切
散
取テ置壇ニ時先置切花次

二ウ」

丸香 次ニ取テ散香器並テ
丸香器ニ一如ク図ノ一置ク壇ニ一也
取リ置ク時ハ切花等ノ器ヲハ
合供ノ時トリカサ子テ
左ノ壇ニヲク也 余ハコマ畢テ
取リ置ク器物等ヲ一如作法一
火舎ノ次ニ先ツ前供養ノ阿
伽等ヲトリヲク也 如本一
一々ニ花埦ニスヘテヲク也
雖無用一見苦シキ故也 次ニ
後供養ヲトリヲク也

已上卿阿闍梨御房伝也

私云
卿闍梨説ハ最初ニ雖取並ト
前供養阿伽器一行海ノ
コマノ次第ニ芥子加持ノ後
取リ置ク阿伽器等一也 仍付ヘシ
次第一先火舎 次鈴五古
次乳木 塗香 次前供養

三ウ」

次供養如是一可取置一也
以前作法如次第
（押紙：壇図）
（以下空白）
（空白）
次散念珠了テ残シ留メテ一
字金輪真言一欲入護摩一
時先結誦仏眼大日部主
本尊印明一
次三平等観（法界定印 卿阿闍梨用此印）
大壇即自身也 自身即本
尊也 本尊即法界也 法界
即火天也 火天即自身也
炉口即我口々々即本尊
御口也 炉中火我智火
也、本尊智火也、三種一
体也、能焼尽煩悩一於
此修三平等観一者先師
口伝也 雑要云先師所伝

四オ」
四ウ」
五オ」

行也 左手執大杓右手執
小杓 以小杓端重大杓上
作此説 次供蘇油也云云已上
私云雑要欲供蘇一時修
三平等観一今依初義一爰ニシテ
可修三平等観一 卿阿闍梨依初説一
次結火天大印ヲ一以左羽ヲ一握ニキテ
右ノ腕ヲ一舒ヘテ右ノ掌ヲ一向テ外一
禅度ヲ横ヨコタヘテ在テ掌中ニ一進度
如クシテ鉤ノ一誦テ小真言加持セヨ
四処ヲ一 唵阿誐娜曳扇底
迦ソハカ 即観ヨ我心月輪ノ
上ニ有リ ram 字一反成ル三角
火輪ト一我身挙体火輪ナリ
反シテ成ル白色火天ノ身ト一四臂
具足セリ 火焔遍身一是遍
法界ノ大身也 如是一観了、
取テ数珠ヲ一誦ヨ小咒百八反ヲ一
咒遍了テ数珠ヲ摺スリテ小祈請、

五ウ」

記理明房次第
次壇上ノ火舎ヲ取テ壇上ノ左
角ニ置之一即取芥子一置
火舎跡一次取三股一以不動
慈救咒一加持芥子一七反、即
取芥子一始自丑寅角投
四方四角上下一可為結界一
卿闍梨説上記之

記理次第
次左手ニ取リ具シテ三股并ニ念
珠ヲ一以右手一先取鈴五古一
置左脇机一次取同方閼
伽等一置左方壇角一次取
右方閼伽等一置右方壇
角一其之後、取右方脇机
塗香一置壇上一次取乳木一
置金剛盤上一本向行者次左方脇
机ノ取切花丸香散香一
置壇上一委細ニハ在図一

六オ」

卿阿闍梨説上記之

記理次第
次以右手一取茅草指環一自塗香中ニ
置左手掌一以右手一結三
古印一誦シテ唵縛曰羅二合地
力二合迦平娑縛二合賀ノ真言一
加持之一三七反、然後貫テ右
無名指ノ上ニ一始作諸法一
入ヘシ指環一

卿阿闍梨用此説

次積薪

（積薪図）

六支本皆向行者前
此上従右一次第六支置
之一三段行之火天部主
本尊也 但右字誤歟
行海流三十六支従左一
積之一良勝流前二十一
支ノ檀木モ皆従左積
之一醍醐亦爾也 然而トモ
今従右一可積之一 卿

七オ」

六ウ」

阿闍梨本、並定祐
僧都本、同右字也
必シモ非誤歟 但卿闍
梨ハ従左一積之此上
積ハ六支一如前一二段
行之一諸尊世天也

（積薪図）

檀木ヲハ以箸ハシヲ一ハサムテ一々二置
之一卿阿闍梨用此説
私云ハシノ時ハ可爾一私行法ニハ以
右手一取檀木一移シテ左手一以
箸一可積之一花蔵院流如此
次薪指火一扇火一扇上観 haṃ
字一想成黒大風輪一七遍
扇之一若火未盛一不可限
数一若自然不可亦扇一可
誦真言一其真言曰ク唵
歩入入縛二合羅吽 三股ハ左
手持ス護摩了マテ 次以灑

七ウ」

浄香水一灑炉中薪上
并諸供物上一已下如作法
部主段
嗽口真言ハ oṃ ハラタ縛曰
羅 ṇaṃ 此言ハ何段モ同也
塗香観呪如上観念ハ如上
呪ハ火天段ニ如誦火天言一
此段ニシテモ可誦部主真言一云事也
唵素婆伜蘇婆吽縛曰
羅吽発吒扇底迦ソハカ
誦此小呪一也卿阿闍梨説如是
蘇油　大小杓同時ニ取テ以
大杓一供シ畢テ先置之一次
以小杓一供之一若小
杓ニモノ付ケハ炉ノハ
タニ小々是ヲタ〃ク也
乳木
本ヲ前ヘ〃向ヘテ取ル也
二十一支内、取テ三支一
前ヲ先ッサシテ指サシテ蘇油ニ一

八オ」

次指サス本トヲ一ヨコサマニ
ナケススクニ投也但
右ノ方ヘ頭ヲスコシフル也
乳木ノサキヲ左ノ方ヘ
サス手ヲウツフシテ指ス
如醍醐一ノケササマニアヲ
ケサル也
本尊段
一字真言 haṃ 也
塗香蘇油等観ハ如上一呪ハ本尊
呪也
卿阿闍梨説爾之
諸尊段
塗香観如前々一呪ハ指自観ノ
中ノ五智真言也卿阿闍梨説爾之
合供　三十七尊ノ次、滅悪趣前ニ
供五大尊各一杓云云
卿阿闍梨説如是一
已下如作法
次破壇作法
観大壇中有 a 字此地輪

九オ」

八ウ」

種子也 此字反成大壇法
然道理所作也 而今有
ham 字成大風輪即破地輪
所謂成者必壊也 即頌曰
諸法従因起　如来説是因
此法随縁滅　是大沙門説
三反誦了取火箸ヲ一引
破ル炉ノ口ヲ一様ニスル也 本
説云以独古ヲ一炉ノ口ヲ打
破ル様ニスルナリ
正応六年二月三日従忍済
真慶両人作法中為行
事抄書之　定仙
（以下空白）
√八千枚事
私云十七巻抄興然作法
中等委可見之一
仏供事
四面仏供トリノクル用意ハ

九ウ」

有人云一如房後供養仏
供等ハトリノケテ至後
供養時一返カヘリテトリヲク也
但左ノ後ハ壇広レハ置之一也
前供養ハ皆トリノク其モ
後ハ壇広レハ置之一也云云
√勧修寺行海流
有人云円日房卿阿闍梨ハ
四面皆前供養時供之一
仍皆是ヲトリノクル也云云
私云此説難供一
√前ヘノ鳥居ニ手巾ヲヌラシ
テカクル也
√又有人云ヒタイニアタル
ホトニウスキ板ヲ鳥居ニワ
タシテユイ付ル也云云
醍醐三宝院
√四面仏供事了上人云前
供養モ後供養モ皆方ヲ

十オ」

十ウ」

タカヘスシテトリノクル也
ママノ後タカヘスシテ前
供養モ後供養モ皆
トリヲク也 前供養ナレハ
トテトリヲカヌ事ハ無也
其後行法ヲシハツル也
私云此説尤可爾
√乳木ニハアフチハシヲ用也
二カ中ニ大旨アウチ也
息災ノ故ニマロニケツル也
√七日三時ノコマニ十万反ノ
慈救咒ヲミツル也 三時ノ
コマノ散念誦ニ配分シテ
満之一也 十万反ハ十億也
云一落又云也 断食日モ誦其
数一也 加持物モ如乳木
数一一度ニ千反ツ〃スル也
乳木千、加持物千、如是一
一段ニスル也 八度也

十一オ」

√菜食作念誦 断食
一昼夜文 義軌(ママ)文也
六日ハ菜食也 第七日ハ
断食也 醍醐辺ハ捨身ノ
行ニテ六日間ハ菜食ヲモ
多クセサル也 高野 安
養院ニテハサ〃ケニテ
ミソヲツクリ山ノイモテイノ
物ヲヲ〃ラカニクウ也 末
代人ノ身カヨワキ故歟
已上了上人説也
√醍醐ハ従後夜一始之一日
中ニ結願、勧修寺ハ初
夜始之一ヨル結願、其日ノ
三時ノコマノ二時ヲハアカ月
タキヲク也
√八千枚間ハ無言行也 結
願ノ時ニ八千枚ヲタク也

十一ウ」

十二オ」

√一 甲子ノ日乳木ヲ伐始也（立春ノ始ノ甲子也）
件乳木ヲハ或ハ二支ニテモ
或ハ三支ニテモ可具之一也
皆甲子ニ雖可伐一大事
故ニ如是一スル也（ナル）
乳木ハ或ハハシ（平濁）或クリ
或ハヒノ木、此等ニ甲子ニ
伐タルヲ具也
√一 乳木ハマロニケツル也モトノ
方ハフトクケツル スミヲ
ツクル也
一 七日ノ菜食ハ縦雖非
時者唯一ト也 長斎ス
ヘシ
√護摩不審等
打金輪事
卿阿闍梨ハ門ノハタノ
而我カタヲ打也云云
（一行空白）

十二ウ」

名香
卿阿闍梨ハ灌頂時ハ登礼
盤一ヤカテ取名名香一
火舎ニヒ子リヲク也 護
摩ノ時ハ入コマノ時火舎ニ
ヒ子ル云云
護摩行事
名香事
裹ムテヲ置ク左ノ脇机一名香ハ
護身法後、加持香水
前ニ取テ名香ヲ少シキ入レ
閼伽ニ一少シキ焼ク火舎ニ一也
云云供ニモ護摩ニモ如是一
曼陀羅供如是一灌頂ノ
護摩、御修法ノ護摩ニハ
不如クセ是一大壇ニ行法ヲハ
修シテ護摩壇ニシテハ護摩許
行之一也云云
灑浄香水加持事

十三オ」

十三ウ」

十四オ」

キリ〃〃ノ真言并 raṃ
字ノ言ノ時ハ逆加持之
vaṃ 字ノ時ハ順加持之
卿阿闍梨説
一云一向順加持之（説阿性房）
西院ノ小補律師ハ raṃ
字ハ逆 vaṃ 字ハ順、兵
部卿法印ハ順逆云云
土御門大納言僧都御
房云逆順ニ加持ス同也云云
羯磨加持
了一上人云先逆三反、
次順三反、六反 加持スル
也 加持ト云ハ必先逆次
順也云云
卿阿闍梨説同之云云
但先順三反次逆三
反也
サ〃メノ仰云御流ニハ先逆

十四ウ

三反次順三反六反也云云
杓ヲツカウ事
卿阿闍梨云取杓一事ハ
同時、置杓一事ハ大杓
ハテ〃ハヤカテ置之一也
次ニ小杓ヲツカイテ置之一
段々如是一
サ〃メノ仰云初ニハ同時ニ
トリ同時ニヲク終リノ
タヒニハトル事ハ同時、ヲ
ク事ハ先大杓、次ニ
小杓也 段々如是云云
醍醐
大政僧正云取杓一事、
同時、置杓一事、同時云云
√発遣ノ花ハ炉ノ傍ラヘ投
也 遠ク不ス投之一（卿阿闍梨伝也）
√油器（在蓋トリ様在之）卿阿闍梨
説也 油器ニハクチ無也

十五オ

十五ウ

√飯五穀ハ行法以前ニ
蓋ヲセス 卿阿闍梨説也
嗽口 灑浄ハフタヲシ
テヲク也 但木ニシテ作之
二ノ蓋ヲシテツ〃ケテ作之二ノ
アヒタニカ子ヲワケテ
打テ中ニ嗽杖灑杖ヲ
貫(ツラヌイ)テヲク也 行法ノ時乍(カラ)
蓋取散杖傍ラニ置テ
散杖ヲヌイテ嗽口器等ノ
上ニヲク也
(嗽口器・灑浄器・散杖置様図)
√飯五コクハ行法以前ニハ
フタヲスル也 承仕望期
フタヲトル也 嗽口灑浄ハ
下ニ置散杖々々ノ上ニ置
蓋也 東寺 天台ニハ蓋ノ
上ニ置散杖也 望期
承仕トリノクル也(常陸僧都説也)

十六オ」

√広沢護摩ニハ世天段ニ取テ
蘇油入ル五穀器合
供ニスル也 別シテ不供之
諸尊段ニハ不爾 如本尊
段等小野ニハ無其義(云)
常陸僧都説也
仏供々養事
前ヘノ一面ノ左右ハ前供養ト
後供養トニ供之也 余ノ三
面ハ摩尼供養ノ時、惣ニ供之也
常陸僧都説也
サ〃メノ仰云常ニハ用此義也(已上)
醍醐
了上人云乍四面前供養ノ
分ハ皆前供養ニ供之
後供養ノ分ハ皆合シテ後供
養ニ供之也 無別子細
私云此説尤爾歟 可付
此義(云云) 佐々目ノ仰云

十六ウ」

十七オ」

用此義一人モアル也 然而トモ
常ニハ用上義一也云
√卿阿闍梨ハ壇ヲ分ケテ行者ノ
右ノ方ハ前供養時供之一
左ノ方ハ後供時供之一下ニ
記之 私ニモ自昔一如是一
行シ付ル也
有人云一如上人行者ノ右ノ方ハマヘ
ウシロ八盃ノ仏供也 表ス
八供養一前供養ノ時ノ飲
食供養時之供一菓子
等ニ至マテ合シテ供之一也 行者ノ
左方ノ方ハマヘウシロ八坏ノ仏
供、後供養ノ飲食ノ時
供養之一菓子等マテ合シテ
供之一也 是モ八坏ハ表八
供養一也
仁和寺勝宝院ニハ十八道ノ
初行時居十六坏仏供一也

十七ウ」

其時如此一習之一
右ハ金剛界、左方ハ胎
蔵界、両界俱ニ互具スル
両部ノ義ヲ一也 常灯ニ灯
明ヲ燃スニハ東寺ニハ右ノ前ヘノ
角ノ一灯ヲ残ス也 表金界一
天台三井ハ残ス左ノ前ヘノ角ノ
一灯ヲ一胎蔵義也 十八道
等ノ初行時ハ六種供具皆
以普供養ノ言一供之一已達ノ
人ハ以o字(ママ)ヲ一供之一也トモ云
私云従昔一愚僧、如是一
供之一也云已上云
乳木投事
卿阿闍梨云右脇机ニ檀木
乳木ヲヲク時ハ本トヲ向ル行者ニ一
也 以乳木一置金剛盤一時モ
以本トヲ一向ル行者一也云云 以乳
木一油ニサス時ハ本トヲ向テ行

十八オ」

十八ウ」

者ニ一前ヲ先ッ油ニサシテ次ニ
本トヲサス也 手ヲ左ヘウツフセテ
前キヲ先ッ指シテ次ニ本トヲサス
投ル時モサキヲ投ル也 カシ
ラヲチト右ヘフル也

已上行海流也

√願上人云蘇悉地経ニハ先サキ
ヲサシ後ニ本トヲサス云
口伝云サキヲサスハ頂戴
智恵灯明一義也 次ニ本トヲ
サスハ乗如実ノ道ニ一義也云
サキハイタ〃キノ義故ニ云頂
戴一也云云
同人云金剛盤ニ置乳木一事、
本トヲ向本尊ニ一也 指油一時ハ
ヤカテ本トヲ上ヘトル也 末ヲ
先ッ指ス次ニ本モトヲサス也
投事如行海一常陸僧都
云故寛位法印説云有

十九オ」

二様一一ニハ先指本一次指末一
断レハ根本無明一枝末無
明自然ニ直ル様也二ニハ先
指末一次指本一断枝末
無明一次断根本無明一
様也云云
了一上人云乳木ヲ脇机ニ置ク
事ハ本ヲ我身ニ向ル也 取
乳木一時ハサカテニトル也 大
指頭指ノカタヲ向ル我身ニ一
也 置ク金剛盤ニ一時ハ本トヲ
向ル本尊ニ一也 取ル金剛盤
乳木一時ハ本トヲ上ヘトル也 本トヲ
大指頭指ノ方ヘトル也 指ス
油ニ一時ハ本トヲ先ッサス 行
海ノ流ノサシヤウニ同也 左ノ
方ヘ手ヲウツフセテサス也
サキヲサス時ハ右ノ方ヘ手ヲ
アヲクル也 投火一時ハ如行

十九ウ」

二十オ」

海ノ流ノ一手ヲノケサマニ持テ
乳木ノカシラヲ右ノ方ヘチト
ソハメテ投也已上
或人云極楽房僧正ハ乳木ヲ
入炉一時手ヲウツフシテ
投ト云云了上人云不爾一
親リ見トキ如前陳一云云
大政僧正御房、一々ニ如了
上人説一置金剛盤一時、
以本一向ハ本尊一以根本無
明一向本尊一也 為是加被一
也云云同人云願上人説ハ
松橋ノ様也 トリヤウハ同也
油ニサスニ末ヲ先ッサス也已上
覚洞院コマ次第云次二十一
支ノ乳木ヲ取テユイヲ〃
トイテ本ヲ前ノ方ニ向テ
金剛盤ノ上ニ置ク已上
相違如何 義云作法ハ皆

二十一オ」

如是一以口伝一相伝シテヲ
コナウ也 如シ前ニ陳スルカ一

二十一ウ」

（以下空白）
十八道
摺念珠事卿阿闍梨ハ
神分終乞諸ノ句時、摺ル
之一乞諸ノ句イ〃ハツルマテ
摺之一ナン度ト云事無シ
又散念誦時、摺之一此ハ
少キ摺也 三度許
発遣ノ花ハ鈴ノ傍ヘ
投也 遠不ス投一

二十二オ」

（以下空白）

⑦【十三函一―二十七】

〔表紙〕

kem a

護摩私記行海

仙芥集

〔表紙裏〕

（空白）

〔本文〕

作壇法、在広略二法一

広法ハ如日記一可用略法一

卿阿闍梨隨此説一

登礼盤一可結輪鍬已下

三ケ印言一

鍬印

金剛縛禅智進力並竪真言曰

oṃ ni kha na va svā na svā hā

泥印 馬頭印也 真言曰

唵阿蜜里二合都納婆二合嚩

吽発吒娑婆賀

糸印 五仏印也外五古 真言曰

唵嚩曰羅賀多羅三摩耶吽

胎云 ra raṃ ka ma ha

已上作壇作法畢

神供ハ三度也 初ハ開白夜、

中ハ中日ノ夜、後ハ結願ノ

前ノ夜也 醍醐如是一良

勝流如是 此流モ爾也

卿阿闍梨説也

羯磨加持

結羯磨印一先順三反

次逆三弁〈已上六反〉

作法ハ七反文 雖然一行事

如是卿阿闍梨説也 醍醐如是

芥子加持

卿阿闍梨説云加持シテ後

一度ニ取テ爐ノ後ロ一度、後ロノ

左右ヘ一度ッ〃投也 文ニタカ

一オ」

一ウ」

ウトイヘトモ如是シツケタリ
ト云已上
サ〃メノ仰云自丑寅角一次
第ニメクテ投之一上
下ヲハ投爐ニ一也 同良勝流一
（一行空白）
積壇木事
佐々目仰云仁和寺ニハ五重
歟 六重歟ニ積之一也
小野ハ三重ニ積也
問上ヘノ六枝ヲ積ム事ハ
従左一積ム歟 従右
積ム歟 仰云従左一積
之一也云云
（一行空白）
器物等左右ヘ取置事
前供養ノ阿(ママ)伽塗香花
鬘ヲトリカサ子テヲヲヲヲヲヲ
ヲヲヲ也 右ノ花立ノ傍ヘヲシ

二オ」

ヤル花院(ママ)トリカサ子テヲ
シヨセヲク也 置処ノサハリ
無シトモカクモ置也 供シタル
花ヲモ取アツメテ阿(ママ)伽等
入ル〃也
次ニハ火舎ヲ取テ左ノ花立ノ
傍ニ置之 次ケシ加持 次ニ
五古ヲ取テヤカテ鈴ニトリ
具シテ左机ニ置ク切花ノソハ
ニ置之一
次金剛盤ヲ行者ノ前ヘ〃
引ヨセテ其上ニ取乳木ヲ一
置之一 本ヲハ行者ノ前ヘ〃
向也 次取右机塗香一
置壇上一也金剛盤右
次取テ花院(ママ)一花鬘塗香
阿伽、品ノ字ノ形ニ置之一
○塗
阿○　○花

二ウ」

三オ」

（空白）

丸香　切花　散香

初取テ置ク壇ニ一時先置切花一
次ニ丸香 次取散香器一
並ヘテ丸香器ニ一如ク壇ノ一置壇ニ一也
後ニ取リ置ク時切花等ノ器ヲハ
合供ノ時トリカサ子テ左ノ
壇ニヲク也 余ハ護摩畢テ
取置器物等ヲ一如作法一
但火舎ノ次ニ先ツ前供養ノ
阿伽等ヲトリヲク也 如本一
一々ニ花院ニスヘテ置也
雖無ト用一見苦シキ故也
次後供養ヲトリヲク也
　已上卿阿闍梨御房伝也

（一行空白）
イ本 私云
卿阿闍梨説ハ最初ニ雖取

三ウ」

置ト前供養阿伽器一行
海ノコマノ次第ニ芥子加持ノ
後取リ置ク阿伽器等一也
仍付ヘシ次第一先火舎次ニ
鈴五古 次乳木 塗香 次
前供養 次後供養如
是可取置一也
次前作法如次第
（押紙：壇図）
次散念珠了テ残シ留メテ一字
金輪真言一欲入護摩一
時、先結誦仏眼大日部
主本尊印明一
次三平等観法界定印
卿阿闍梨用此印
大壇即自身也 自身即
本尊也 本尊即法
界也 法界即火天也
火天即自身也 炉口即

四オ」

四ウ」

五オ」

我口即本尊御口也炉
中火我智火也 本尊
智火也三種一体也 能
焼尽煩悩 於此修三
平等観者先師口伝也
雑要云先師所伝行也 左
手執大杓右手執小
杓以小杓端重大杓上
作此観 次供蘇油也云云
已上私云雑要欲供蘇
時、修三平等観 今依
初義 爰可修三平等観
卿阿闍梨、依初説
次結火天大印ヲ 以左羽ヲ 握
右腕ヲ 舒ヘテ右ノ掌ヲ 向外
禅度ヲ横在掌中ニ 進度
如クシテ鉤ノ 誦小真言ヲ 加持セヨ四
処ヲ 唵阿誐娜曳扇底
迦ソハカ

五ウ」

六オ」

即観ヨ我心月輪ノ上ニ有リ ram
字 反成ル三角火輪ト 我
身挙ヨ体火輪ナリ反(マヲヲ)成ル白
色ノ火天ノ身ト 四臂具足セリ
火焔遍ス身ニ 是遍法界大
身也 如是観了、取テ数珠ヲ
誦ヨ小呪百八反ヲ 呪遍了
数珠ヲ摺リテ小祈請

記理明房次第

次壇上火舎ヲ取テ壇上ノ左角
置ヲク之 即取芥子 置火
舎跡 次取三股 以不動
慈救咒 加持芥子 七反、
即取芥子 始自丑寅角
投四方四角上下 可為結界

卿阿闍梨説上記之

記理次第

次左手ニ取リ具シテ三股并念珠ヲ
以右手 先取鈴五古 置
左脇机 次取同方閼伽等

六ウ」

置左方壇角一 次取右方
閼伽等一置右方壇角一其
之後取右方脇机塗香一
置壇上一 次取乳木一置金
剛盤上ニ一 次左方脇机ノ取
切花 丸香 散香 置壇
上一 委細ニハ在壇一（ママ）（卿闍梨説 上記之）
記理次第
次以右手一取茅草指環一
置左手掌一以右手一結
三古印一誦シテ唵縛曰羅二合
地力二合迦平娑縛二合加ノ真言一
加持之一三七反、然後貫テ
右無名指ノ上ニ一始作諸法一
自塗香中ニ入ルヘシ指環一
卿闍梨用此説
（一行空白）
次積薪
（積薪図）此上従右一次第六
六支本皆向行者前

七オ」

支置之一三段行
之火天部主本尊
也 但右字誤歟
行海流三十六支
従左積之一良勝
流亦二十一支ノ壇木モ
皆従左一積之一醍醐
亦爾也 然而トモ今従
（積薪図）右可積之一卿阿闍
梨本、并定祐僧都
本同右字也 必シモ非
誤歟 但卿闍梨従左一
積之此上積六支如前
二段行之一諸尊世天也
壇木ヲハ以箸ハシヲ一ハサムテ一々ニ置之
卿阿闍梨用此説
私云ハレノ時ハ可爾一私行法ニハ以
右手一取壇木一移シテ左手一
以箸積之花蔵院流如此一

七ウ」

八オ」

次薪指火一扇火一扇上観
haṃ字一相成黒大風輪一七
遍扇之一若火未盛一不可
限数若自然不可必扇一
可誦真言一其真言曰ク
唵歩入入縛合羅吽
三股ハ左手持ス護摩了ル
マテ次以灑浄香水一灑炉
中薪上并諸供物上一
已上如作法
（一行空白）
部主段
嗽曰（ママ）真言ハ唵ハラタ
縛曰羅タン此言ハ何段モ用也
塗香 観呪如上 観念ハ如
上 呪ハ火天段ニ如誦
火天言一此段ニテモ可
誦部主真言一云事也
唵素婆你素婆吽縛曰

八ウ」

羅吽発吒扇底迦ソハカ
誦此少呪（ママ）也卿阿闍梨説如是
（一行空白）
蘇油 大小杓同時ニ取テ以
大杓一供シ畢テ先置
之一次以小杓一供之一
若小杓ニモノ付テハ
炉ノハタニ小々是ヲ
タ〃ク也
（一行空白）
乳木 本ヲ前ヘニ向ヘテ取也
二十一支内、取三支一
前ヲ先ッ指蘇油ニ一次
指ス本ヲ一ヨコサマニテ
ケス（ママ）スクニ投也 但
右ノ方ヘ頭ヲスコシフル
也 乳木ノサキヲ左ノ方ヘ
サス手ヲウツフシテ
指ス如醍醐一ノケサマニ

九ウ」

アヲケサル也

本尊段

塗香蘇油等（観ハ如上 呪ハ本〇（一字真言 haṃ 也）尊呪也）

卿阿闍梨説爾也

諸尊段

塗木観如前々一 呪ハ指自

観ノ中ノ五智真言也

卿阿闍梨説如是等也

合供三十七尊ノ次ニ滅悪趣前ニ

供五大尊一各一杓云云

卿阿闍梨説如是

已下如作法

（一行空白）

次破壇作法

観大壇中有a字此地

輪種子也 此字反成大

壇法然道理所作也 而

今有haṃ字成大風輪即

破地輪所謂成者必壊也

十オ」

（一行空白）

即頌曰

諸法従因起 如来説是因

此法随縁滅 是大沙門説

三反誦了取火箸ヲ一引

破炉口ヲ一様ニスル也

本説云以独鈷ヲ一炉口ヲ

打破ル様ニスルナリ

正応六年二月三日従忍済

真慶両人作法中為

行事抄出之

（以下空白）

十ウ」